

連載
講座

第30回

ヒューマニズム養成塾・適塾と緒方洪庵

作家 童門冬二

多彩な塾生たち

「元来適塾は医家の塾とはいえその実蘭書解説の研究所にて、諸生には医師に限らず兵学者もあり砲術家もあり、本草家（植物学者）も舎密家（科学者）もおよそ蘭学を志すほどの人は皆この塾に入りてその支度をなす」。

これは適塾の出身者で明治医学界発展の大功労者だった長与専齋が適塾について書いた一文だ。適塾の性格と特性を余す所なく的確に告げている。

適塾（正確には適々齋塾）はオランダ医学者緒方洪庵の私塾だが、長与専齋のいうように医者だけでなく、まさに多彩な異材を輩出した。兵学者・砲術家としては、大村益次郎（村田蔵六）・大島圭介・佐野常民などがいる（佐野は近代兵器の製作だけでなく、のちに日本赤十字の創設者になる）。橋本佐内は医師だが国事奔走の志士で安政の大獄で刑死する。福沢諭吉は思想家・大教育者。菊池秋坪はオランダ学者、ほかにも足立寛・高松凌雲・池田謙齋・大戸郁蔵など名のある人物が学んだ。

塾の開設者緒方洪庵は備中（岡山県）足守藩士の家に生れ、父が大坂の蔵役人だったので、これに従って大坂に出た。しかし好学の志がありしかもオランダ学に志していた。江戸に出て坪井信道の門に入り、この縁で多くのオランダ学者の指導を得た。坪井家では貧しい洪庵に同情し、内弟子

として衣食のせわをしたという。

やがて長崎に行き本格的にオランダ学をまなんだ。大坂に戻ってオランダ学の塾をひらいた。適塾をひらいたのは天保14年12月のことである。やがてその実績が幕府に知られ、文久2年8月には幕府の「西洋医学所頭取兼將軍の侍医」を命ぜられた。大坂時代にはすでに種痘事業を起し、西洋医学所は種痘所を発展拡充させたものである。コレラ対策にも思いきった実績を残している。

在職10か月で洪庵は文久3年6月に急死する。適塾経営は24年間にわたったといわれる。

かれの教育方針は「なによりも各人の自主性を重んずる」ということだった。もちろんオランダ塾だから、「オランダ語の訳読を中心とする」という基本は守らせる。しかしその後は塾生同士の研磨を大切にし、よほどのことがなければ洪庵自身が講義することはなかった。塾生間には「学級制」を設けた。入塾の新旧をとわず、学習成績によって進級させた。先輩が怠けて落第することもあった。

学生たちの生活は自由の氣にみち、各大名からたのまれる翻訳の内職は、大いに生活をエンジョイさせた。牛肉を食べはじめたのもかれらだ。この時はさすがに世間を憚って、淀川に舟を浮べて七輪の上に鍋を乗せたという。

医学者としての洪庵はひとつの鉄則を持っていた。その著書の中で、

「病者に対してはただ病をみるべし。貴賤貧富を顧ることなかれ」と書いている。富者にこびることなく、庶民を大切にせるといふいましめである。これが佐野や高松に敵味方なく戦傷病者を加療する“赤十字精神”を生ませるのだ。その意味では「適塾はヒューマンイズムの育成塾だ」といっていい。

相乗効果による人間愛

有名な話がある。福沢諭吉が塾長（塾生代表）のころの話だ。橋本左内が毎晩日がくるとどこかに出かけていく。左内は越前（福井県）藩の医者で若い。そしてかなりのイケメンだ。福沢はカンぐった。（女が出来たか）。もしそうなら塾長の手前きびしく取締まなければならない。ある夜、そっと橋本のあとを尾けた。

大坂は川が多い。川には皆橋が架かっている。その数も多く“八百八橋”といわれる。橋本はそのひとつの下にもぐりこんでいった。福沢は気づかれぬようにそっとあとを尾けた。やがて橋の下で話し声がした。

「カゼはなおったか」「足の傷は痛まないか」「のどの薬を持ってきてやったぞ」その声をきいて福沢は心の中で思わずアッと声をあげた。すべて橋本の声だった。橋本は夜になると橋の下でくらす貧しい人びとで、病気にかかった者やケガをした者を診察し、手当をしていたのだ。

福沢はそんな橋本を疑い、しかも（女でもでき

たか）と卑しい好奇心で、尾行までした自分を恥じた。その夜福沢は橋本のボランティア活動がすむまで待った。橋本の活動は何本もの橋に及んでいた。最後の奉仕がすんだのは翌朝の未明だった。しかし福沢はじっと待った。橋の上にたたずんでいた。

ようやく土堤を上ってくる橋本の姿をみて、福沢は「橋本君」と声をかけた。橋本はビックリした。「福沢さん！ どうしたんですか」

礼儀正しい橋本は敬語を使った。福沢は、「実はだな」と、自分の行動を恥じながら語った。そして「おろかなオレを許してくれ」と謝った。橋本は恐縮した。そして、「私こそとんだ姿を見られてしまいました。福沢さん、どうか塾の連中には内密にして下さい」と頼んだ。

適塾は師洪庵の指導だけではない。塾生同士のこういう相乗効果が、明治の新日本をゆたかで温いものに仕立てていったのだ。

ただ福沢の「自伝」その他を組みあわせてみると、洪庵とその妻（八重）に一番愛されたのは福沢諭吉らしい。洪庵夫婦は子供のように福沢を可愛がっている。福沢も甘えている。妻によばれて慌てて二階から走りおりてきた時、福沢はフリチンだった。という話が自伝に書かれている。かれが「学問のすすめ」の冒頭に書いた有名な言葉。

「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずと云えり」も、もちろんかれの中津（大分県）時代のこともあるが、平等体験はこの適塾だったかも知れない。